



# 福富小畠遺跡 C 地点

行橋市文化財調査報告書 第 60 集

2016

行橋市教育委員会





## 序

本書は、平成 19 年度に個人住宅の建設に先だって実施した福富小畠遺跡 C 地点の埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

遺跡は京都平野中央の低台地上に広がる古墳時代から中世にかけての集落遺跡です。今回の調査では古墳時代後期の集落の一部を確認しました。この成果は、当地の地域史の解明に寄与する重要な成果であると思われます。本書が埋蔵文化財に対する認識と理解を深め、文化財愛護の思想の普及を進める一助となれば幸いです。

なお、発掘調査および報告書作成にあたってご協力いただいた土地所有者をはじめとする地元の方々、福岡県教育委員会など関係諸機関に深く感謝いたします。

平成 28 年 3 月

行橋市教育委員会  
教育長 笹山 忠則



## 例　　言

1. 本書は、福岡県行橋市西泉3丁目1310-2に所在する福富小畠遺跡C地点の発掘調査報告書である。  
個人住宅の建設に伴い、平成19年度に国庫補助を受けて発掘調査を実施した。
2. 調査および報告書作成は、行橋市教育委員会が主体となって行った。  
調査組織は第1章第2節に記す。
3. 遺構の実測は田中すま子、谷口真子、中島裕子、古木初子が行った。
4. 遺構写真は伊藤昌広が撮影した。
5. 遺物の接合・復元は枝吉恵美、佐々木豊子が行った。
6. 遺物の実測は定野美津子が行った。
7. 遺物写真は天野正太郎が撮影した。
8. 遺構・遺物図面の作成は松本まゆみが行った。
9. 本書に使用した遺構の略号はS A（柵列）、S X（不明土坑）、P（ピット）である。
10. 本書に使用した方位は、世界測地系に基づく座標北である。
11. 報告した遺物、図面、写真是行橋市教育委員会において保管している。
12. 本書の執筆および編集は、山口裕平の助言を受けて天野が行った。



## 本文目次

第1章 はじめに .....	1
第1節 調査の経緯と経過 .....	1
第2節 調査体制 .....	1
第2章 遺跡の位置と環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 福富小畠遺跡 C 地点 .....	5
第4章 結語 .....	9

## 図版目次

図版 1	1. 福富小畠遺跡 C 地点周辺空中写真①	
図版 2	1. 福富小畠遺跡 C 地点周辺空中写真②	2. 調査前風景
図版 3	1. SA01	2. SA02
図版 4	1. SX04	2. 挖削作業風景
図版 5	福富小畠遺跡 C 地点出土遺物 1	3. 測量作業風景
図版 6	福富小畠遺跡 C 地点出土遺物 2	

## 挿図目次

第 1 図	福富小畠遺跡の位置 (1/2,000,000)
第 2 図	京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)
第 3 図	福富小畠遺跡調査区域 (1/6,000)
第 4 図	福富小畠遺跡 C 地点遺構配置図 (1/200)
第 5 図	福富小畠遺跡 C 地点遺構個別図 (1/40)
第 6 図	福富小畠遺跡 C 地点出土遺物実測図 1 (1/3)
第 7 図	福富小畠遺跡 C 地点出土遺物実測図 2 (1/3)

## 表目次

表 1	福富小畠遺跡 C 地点出土遺物観察表
-----	--------------------



# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経緯と経過

当発掘調査は、行橋市西泉3丁目1310-2における個人住宅建設に伴い実施したものである。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「福富小畠遺跡」にあたるため平成20年2月29日に試掘調査を行ったところ、表土直下より柵列らしき遺構と遺物を確認した。施主と協議の結果、国庫補助を受けて発掘調査を実施し、遺跡を記録保存することになった。同年3月26日に改めて重機を用いて表土はぎを行い、28日に掘削、記録を開始し、31日までに調査を完了した。調査に要した期間は4日間である。調査の結果、柵列、土坑、ピットが検出され、主に古墳時代から古代にかけての土器が出土した。調査面積は約108m<sup>2</sup>である。

## 第2節 調査体制

### 現地調査（平成19年度）

総括	行橋市教育委員会	教育長	徳永文晤
		教育部長	尾畠和敏
調査		教育部文化課長	奥 廣俊
		教育部文化課文化財保護係長	小川秀樹
		教育部文化課文化財保護係	伊藤昌広（調査担当）
		教育部文化課文化財保護係	中原 博
庶務		教育部文化課文化振興係長	辛嶋智恵子
		教育部文化課文化振興係	鎌田浩平
発掘作業從事者			
	猪之鼻範夫	角田義彦	末永修崇
	田中すま子	谷口貞子	中島裕子
			今村美香
			古木初子
			佐藤愛子
			島木邦子

### 報告書作成（平成27年度）

総括	行橋市教育委員会	教育長	笛山忠則
		教育部長	坪根義光
調査		教育部文化課長	亀田秀雄
		教育部文化課参事兼文化財保護係長	小川秀樹
		教育部文化課文化財保護係	中原 博
		教育部文化課文化財保護係	山口裕平
		教育部文化課文化財保護係	天野正太郎（報告担当）
庶務		教育部文化課文化振興係長	高尾信次郎（～10月30日）
		教育部文化課文化振興係長	森 雅代（11月1日～）
		教育部文化課文化振興係主任主査	森 雅代（～10月30日）
		教育部文化課文化振興係主任主査	高尾信次郎（11月1日～）
		教育部文化課文化振興係	田坂 彩

### 整理作業員

枝吉恵美 奥野康代 鎌田尚子 佐々木豊子 定野美津子 松尾留衣 松本まゆみ



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

福岡県行橋市は県北東部に所在する（第1図）。京築地方の中心都市で、人口72,759人（平成27年12月末日現在）を擁す。市域は京都平野の中央部を占め、東は周防灘に臨む。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳[216m]、御所ヶ岳[ホトギ山:246.9m]などが東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域との市町境をなす。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に觀音山[202m]、幸ノ山[178m]、覗山[121.7m]など少數の独立山塊がある。市内には盡峰・英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川、長崎川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、周防灘に注ぐ。

本書で報告する福富小畠遺跡は今川と祓川に挟まれた豊津原台地上、標高10m前後に立地する。

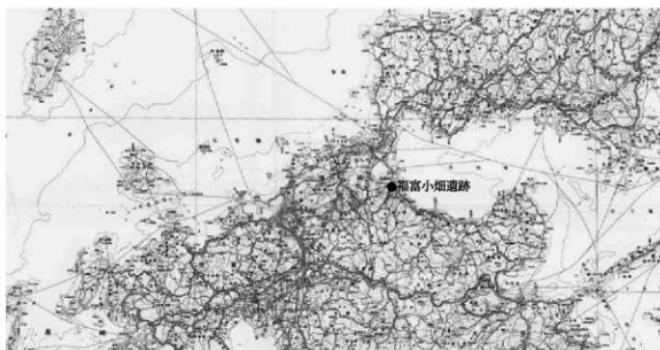
### 第2節 歴史的環境

京都平野における人類の痕跡は今からおよそ3万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼり、市域では渡築紫遺跡C区で当該期の石器および礫群が見つかっている。

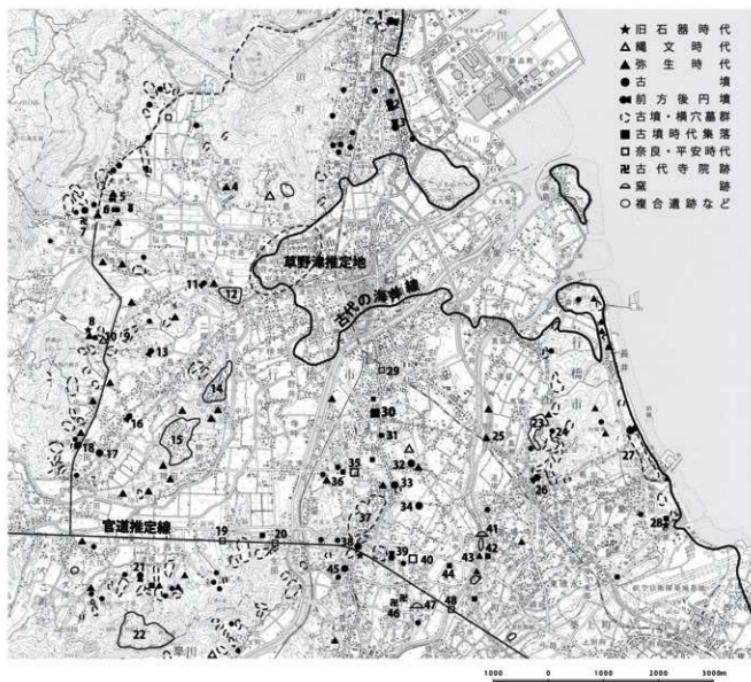
続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは約4800年前頃で、現在の延永一津熊一大橋—今井一津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸時代以来の干拓によって養島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾状の臨海平野を形成していた（第2図）。縄文時代の遺跡は、遺構は不明確ながら、早期の押型文土器や後期の西平式系土器など、各期の遺物が徐々に知られるようになってきた。

2500年前頃を境に、生業の主体を狩猟採集とする縄文時代から稻作農耕とする弥生時代へと変化していく。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下神田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。

3世紀後半頃に始まる古墳時代には九州最古級の畿内型前方後円墳である石塚山古墳が苅田町域に築かれ、その海浜部で前期から中期への首長墓系譜をたどることができる。後期には京都平野内部に移動し、市内では八雷古墳が6世紀前半の首長墓と考えられる。7世紀になると全国的に古墳築造は停止傾向になり



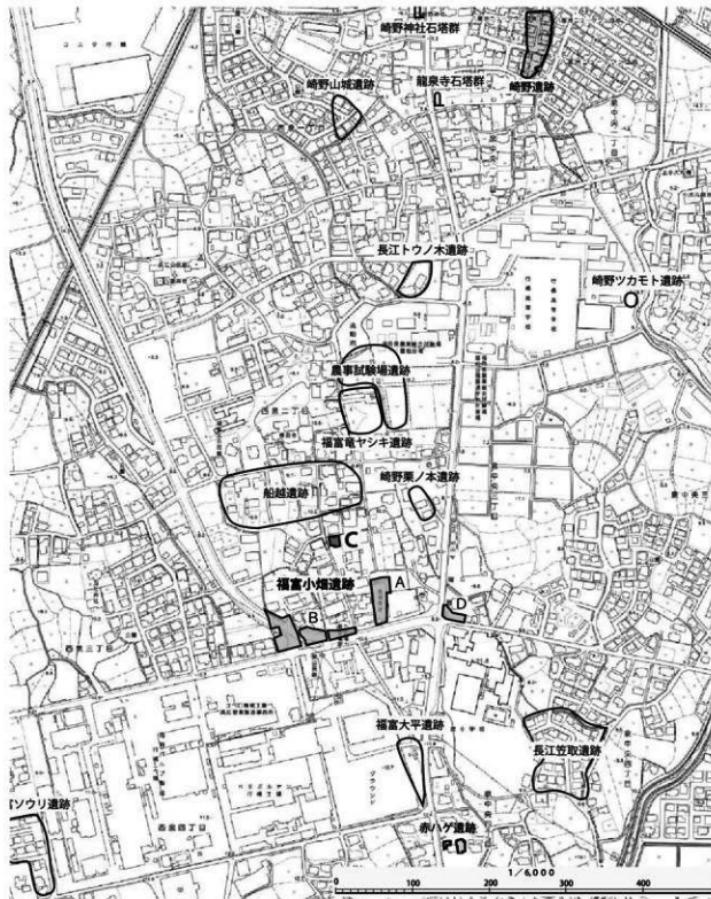
第1図 福富小畠遺跡の位置(1/2,000,000)



- |             |             |            |             |             |              |
|-------------|-------------|------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 石塚山古墳    | 2. 番塚古墳     | 3. 御所山古墳   | 4. 菊川遺跡     | 5. 黒添メトウ塚古墳 | 6. 離永丸山古墳    |
| 7. 椿市廐寺     | 8. 入覚大原遺跡   | 9. 下崎丸山遺跡  | 10. 下崎瀬戸清遺跡 | 11. ピノクマ古墳  | 12. 福永ヤヨミ園遺跡 |
| 13. 八重古墳    | 14. 前田山遺跡   | 15. 下畔田遺跡  | 16. 庄屋塚古墳   | 17. 椿塚古墳    | 18. 桜塚古墳     |
| 19. 大谷草堀遺跡  | 20. 天生田大池遺跡 | 21. 片峰1号墳  | 22. 御所ヶ谷神籠石 | 23. 代遺跡     | 24. 馬場代2号墳   |
| 25. 讃岐道跡    | 26. 半人塚古墳   | 27. 稲童古墳群  | 28. 渡葉集落遺跡  | 29. 岐野遺跡    | 30. 福富小畑遺跡   |
| 31. 赤ハゲ道跡   | 32. 侍塚遺跡    | 33. ヒメコ塚古墳 | 34. 鬼熊遺跡    | 35. 福原長者原遺跡 | 36. 矢留堂ノ前遺跡  |
| 37. 竹並道跡    | 38. 甲塚方墳    | 39. 想社古墳   | 40. 豊前國府跡   | 41. 国庭敷石跡   | 42. 関先道跡     |
| 43. 福永川ノ上遺跡 | 44. 京ヶ辻遺跡   | 45. 莢體甲塚古墳 | 46. 豊前国分寺跡  | 47. 墓政瓦窯跡   | 48. 佐見櫛ノ口遺跡  |

第2図 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)

古墳時代の終末期に入るが、京都平野では古墳時代終末期になっても古墳築造が盛行する。市内では福丸古墳群、渡築紫古墳群などが調査されている。この時代は古代史の上では飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。市内では福丸地区に椿市廐寺が建立された。またこの頃、対大陸・半島情勢の悪化に伴い、津波に古代山城である御所ヶ谷神籠石が築かれた。泉地区に所在する福原長者原遺跡は150m四方の区画をもつ7世紀末から8世紀前半の大規模な官衙遺跡で、律令国家成立期の豊前国府に先立つ重要な官衙である可能性が指摘されている。



第3図 福富小畠遺跡調査区域(1/6,000)

本書で報告する福富小畠遺跡は古墳時代から中世の複合遺跡である。南北に伸びる低丘陵上に位置し、周辺には周知の埋蔵文化財包蔵地が南北に連なるように点在する。約750m北の峠野遺跡は発掘調査によって古墳時代後期から平安時代にかけての集落が確認されており、大規模な二面庇掘立柱建物や那州窯系白磁片・緑釉陶器といった特殊な遺物から、一般集落ではなく郷程度の地域を管理する有力者の居館や海岸部の物資集積施設などの可能性が考えられている。約300m南に位置する赤ハゲ遺跡は軟質土器の角形把手付塊が出土した古墳時代後期の集落跡で、渡来人との関わりが推定される。約1km南には1,000基以上の横穴墓が営まれた竹並遺跡があり、この周辺の集落の墓域であった可能性が高い。



## 第3章 福富小畠遺跡C地点

福富小畠遺跡は今川と祓川に挟まれた豊津原台地上に立地する。2015年現在A～Dの4地点が調査され、B地点とD地点が既に報告されている。

本書で報告するC地点は遺跡の北部に位置し、行政地番では行橋市泉中央3丁目1310-2にある。調査前は畠地として利用されていた。調査面積は108m<sup>2</sup>である。表土層は現地表面から10cm程度と浅く、その下の黄褐色の風化火山灰土からなる地山に遺構が掘りこまれている。

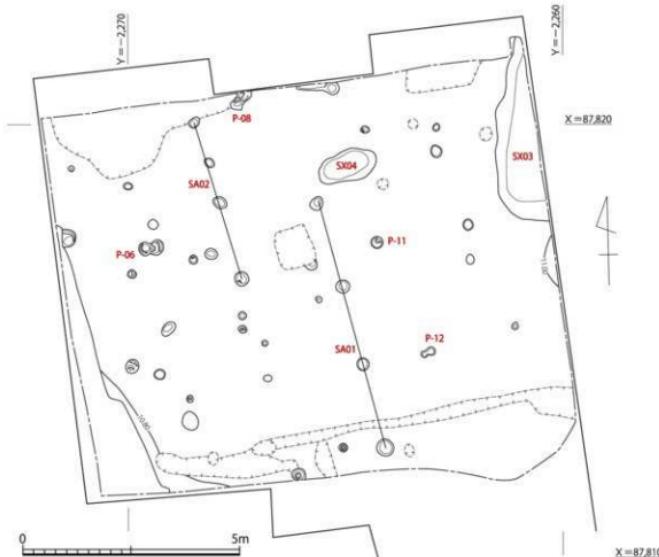
調査の結果、柵列らしき柱穴2条と2基の土坑、その他多数の柱穴を検出し、古墳時代から古代にかけての遺物が出土した。遺構検出面はおおむね平坦で標高は10.9mでわずかに南西に向かって傾斜し、南西隅で落ち込み10.6mとなる。

以下、本調査で検出した主な遺構と出土遺物について報告する。

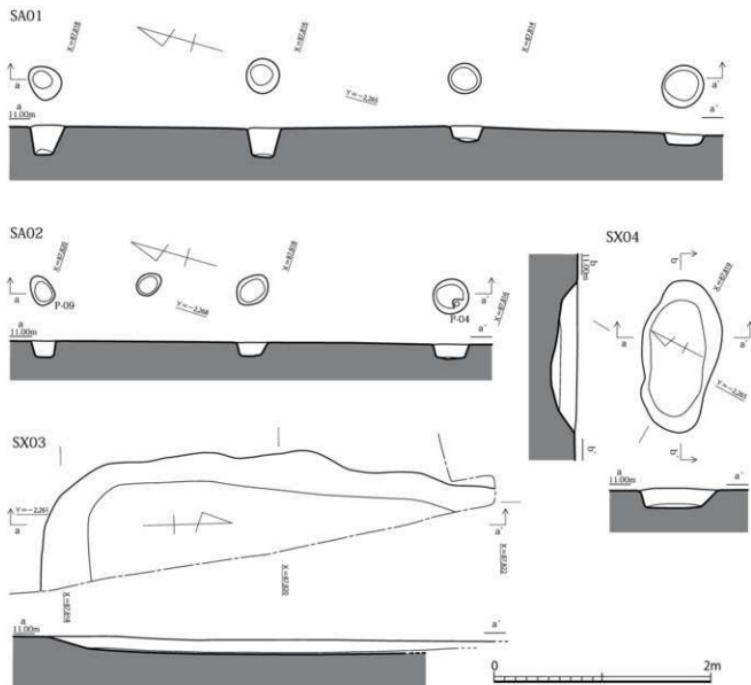
### (1) 柵列

#### SA01 (第5図、図版3)

径約30～40cm、深さ約10～30cmの4基のピットが直線状に約6mにわたって連なり、柵遺構の可能性がある。主軸方位はW-16°-Nで、4基のピットの柱心間距離は北から2.0m、1.9m、2.0mである。



第4図 福富小畠遺跡C地点遺構配置図 (1/100)



第5図 福富小畑遺跡C地点遺構個別図 (1/40)

北側に等間隔で続くピットは見られないが、南側は調査区外に続く可能性を残す。遺物は出土しなかった。

#### S A 0 2 ( 第 5 図、図版 3 )

径約30cm、深さ約10cmの3基のピットが直線状に並び柵遺構の可能性がある。長さは約4mであるが、南側に続くピットが見られないものの北側は調査区外に続く可能性が残る。主軸方位はW-16°-NとSA01と一致し、約2.2mの間隔で平行である。3基のピットの柱心間距離は北から2.0m、1.9m、2.0mである。須恵器蓋坏片が出土した。

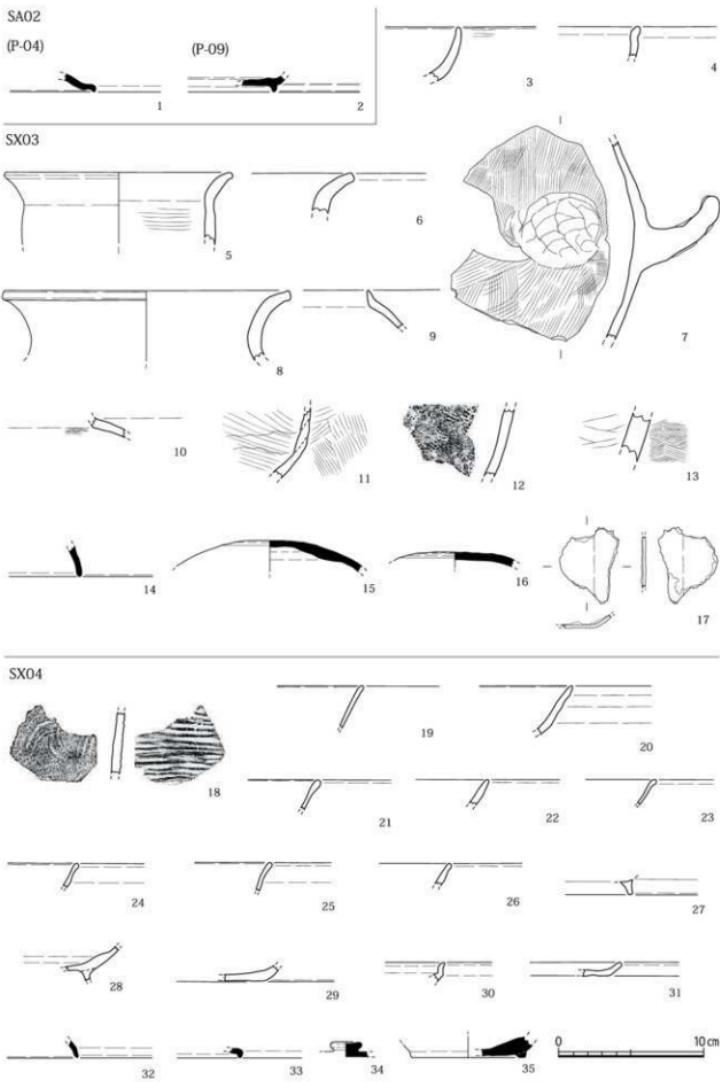
#### 出土遺物 ( 第6図、図版5 )

須恵器 1は坏B蓋。端部の折り返しが弱い。2は坏B身。高台がやや高い。

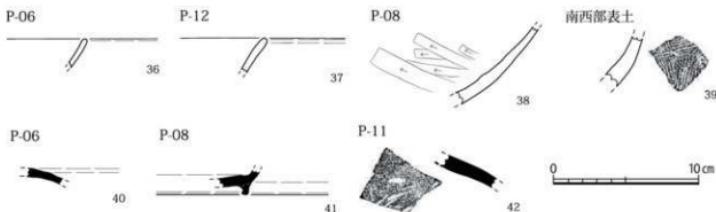
#### ( 2 ) 土坑

#### S X 0 3 ( 第 5 図、図版 3 )

調査区の北東際に位置するため全容を把握できないが、平面は4.2m以上×0.7m以上、検出面からの深



第6図 福富小畠遺跡C地点出土遺物実測図1 (1/3)



第7図 福富小畠遺跡C地点出土遺物実測図2 (1/3)

さは約12cmで床面は平らである。壁の傾斜が緩いが、長辺は直線的で短辺との間が直角をなし、正方形の堅穴建物の可能性がある。主軸方位はN-5°-Eである。遺物は須恵器壺蓋、土師器壺・甕・瓶類、器種不明の鉄器が出土した。

#### 出土遺物（第6図、図版5）

土師器 3は鉢。4～6は甕口縁部。7は惣甕類の把手および胴部。把手は扁平で指頭圧痕が多く残る。また胴部に対してやや右に傾いて接着されている。胴部は外面とも板状工具によりハケメを施す。8～10は壺。11～13は胴部。

須恵器 14は環H蓋。口縁端部がかすかに段をなす。15・16は環H蓋天井部あるいは身底部。15は焼成不良で白色を呈する。

鉄器 17. 器種不明。厚さ約3mmの板状で、平面部分から折れを挟んで曲面となる。

#### SX04（第5図、図版4）

調査区北東部に位置する。平面形は1.4×0.7mの楕円形を呈し、深さは約15cmである。主軸方位はN-62°-Eを指す。須恵器、土師器が出土した。

#### 出土遺物（第6図、図版6）

繩文土器 18は胴部片。外面は条痕が施され、内面には薄く同心弧文が残る。

土師器 19～28は甕。胎土が精良である。26は内面が黒化している。29～31は小皿。後世の混入と思われる。29・31とともに底部に板状圧痕は認められない。

須恵器 32～34は環B蓋。32は端部をほぼ折り返さない。34はつまみで、中央をくぼませる。35は環B身の底部。高台は低い。

#### (3) その他

以下はその他のピット及び表土より出土した遺物である。

#### 出土遺物（第7図、図版6）

土師器 1・2は鉢。3・4は甕・瓶類の胴部。3は胎土が粗く、内面にケズリ痕が残る。外面の大部分が黒斑である。4は胎土が精良で外面にカキメが残る。

須恵器 5は環蓋。6は環身。高台が高い。7は甕・瓶類の胴部。外面に帯状に自然釉がかかる。

表1 福富小畠遺跡C地点出土遺物觀察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高③底径④最大径 (復元値)(残存部)	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	残存	備考
1	須恵器	壺B蓋	SX02	②<1.3>	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	A:1mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:灰白色	端部片	
2	須恵器	壺B身	SX02	②<1.2>	外面:回転ナデ、 底部回転へラ切り 内面:回転ナデ	A:1mm以下の砂粒をわずかに含む B:良好 C:灰白色	高台部片	
3	土師器	鉢	SX03	②<3.75>	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ	A:2mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:外) 横色、内) 橙色、浅黄褐色	口縁部片	
4	土師器	鉢	SX03	②<2.1>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:1mm以下の砂粒を含む B:良好 C:明赤褐色	口縁部片	
5	土師質土器	甕	SX03	①(16.0)②<5.05>	外面:調整不明 内面:ハケメ	A:1.5mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:外) 横色、内) 橙色、にい) 黄褐色	口縁部	
6	土師器	甕	SX03	②<2.9>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:2mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:橙色	口縁部片	
7	土師質土器	甕	SX03	②<13.8>	外面:ハケメ、 指おえ 内面:ハケメ	A:1~2mmの砂粒を含む B:良好 C:外) にい) 橙色、内) にい) 橙色	把手・ 胸部	
8	土師器	甕	SX03	①(20.1)②<4.9>	外面:ナデ、ハケメ 内面:調整不明	A:1~2mmの砂粒を多く含む B:良好 C:橙色、にい) 黄褐色	口縁部	
9	土師器	無頬甕	SX03	②<1.85>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:橙色	口縁部片	
10	土師器	甕	SX03	②<1.45>	外面:ナデ 内面:ハケメ	A:3mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:にい) 赤褐色	頸部片	
11	土師器	甕	SX03	②<4.9>	外面:ハケメ 内面:粘土紐積み上 げ	A:微細な砂粒を多く含む B:良好 C:外) 横色、灰褐色、 内) にい) 橙色、浅黄褐色	胸部	
12	土師器	甕or壺	SX03	②<4.7>	外面:調整不明 内面:同心円紋	A:1mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:外) 橙色、内) 灰黄色、黃褐色	胸部片	
13	土師質土器	?	SX03	②<3.4>	外面:ハケメ 内面:ケズリ	A:1mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:外) 横褐色、内) 橙色	胸部片	
14	須恵器	壺蓋	SX03	②<2.2>	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:灰オーバー色	口縁部片	
15	須恵器	蓋壺	SX03	②<2.3>	外面:回転ナデ、 回転へラケズリ 内面:回転ナデ	A:2mm以下の砂粒を多く含む B:不良 C:灰白色	天井部	
16	須恵器	蓋壺	SX03	②<1.05>	外面:回転ナデ、 回転へラケズリ 内面:ナデ	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:灰色	天井部	
17	鉄製品	不明	SX03	最大長<4.1> 最大幅<5.35> 最大厚<0.2>	—	—	—	
18	繩文土器	鉢	SX04	②<4.3>	外面:条痕文 内面:同心弧文	A:3mm以下の砂粒を含む B:良好 C:外) 灰褐色、黒褐色、 内) 灰褐色、にい) 橙色	胸部片	
19	土師器	椀	SX04	②<2.95>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:1.5mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:橙色	口縁部片	
20	土師器	椀	SX04	②<3.4>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:2mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:明赤褐色	口縁部片	
21	土師器	椀	SX04	②<2.1>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:1mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:橙色	口縁部片	

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高③底径④最大径 (復元値)<残存值>	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	残存	備考
22	土師器	楕or坏	SX04	②<1.8>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:1mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:明赤褐色、黒褐色	口縁部片	
23	土師器	楕	SX04	②<1.75>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:微細な砂粒を多く含む B:良好 C:橙色	口縁部片	
24	土師器	楕	SX04	②<1.7>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:微細な砂粒を多く含む B:良好 C:橙色	口縁部片	
25	土師器	楕	SX04	②<2.0>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:微細な砂粒を多く含む B:良好 C:明赤褐色	口縁部片	
26	土師器	楕	SX04	②<1.55>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:微細な砂粒を多く含む B:良好 C:外)褐灰色、にぶい褐色、内)褐灰色	口縁部片	
27	土師器	楕	SX04	②<1.05>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:微細な砂粒をわずかに含む B:良好 C:明赤褐色	高台部片	
28	土師器	坏	SX04	②<2.6>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:1mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:にぶい橙色	底部片	
29	土師器	坏	SX04	②<1.1>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:1mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:橙色	底部	
30	土師器	小皿	SX04	②<1.3>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:微細な砂粒をわずかに含む B:良好 C:橙色	口縁部片	
31	土師器	小皿	SX04	②<0.95>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:1~2mmの砂粒をわずかに含む B:良好 C:橙色	口縁部~底部	
32	須恵器	坏蓋	SX04	②<1.3>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:外)黒色、内)灰黄褐色	口縁部片	
33	須恵器	坏B蓋	SX04	②<0.7>	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:灰黄色	口縁部片	
34	須恵器	坏B蓋	SX04	②<1.05>	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	A:精良 B:良好 C:オリーブ灰色	つまみ部片	
35	須恵器	壺	SX04	②<1.5>③(8.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	A:微細な砂粒を多く含む B:良好 C:灰色	底部	
36	土師器	鉢	P-06	②<2.0>	外面:ナデ 内面:ナデ	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:橙色	口縁部片	
37	土師器	楕	P-12	②(2.4)	外面:ナデ 内面:ナデ	A:2mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:橙色	口縁部片	
38	土師器	甕	P-08	②<5.4>	外面:調整不明 内面:ケズリ	A:6mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:外)黒色、橙色、 内)にぶい褐色、橙色	胴部	
39	土師器	壺	南西部 表土	②<3.45>	外面:ハケヌ 内面:ナデ	A:2mm以下の砂粒を多く含む B:良好 C:外)褐灰色、にぶい黄褐色、 内)にぶい黄褐色	胴部片	
40	須恵器	壺坏	P-06	②<1.2>	外面:回転ナデ、 回転ヘタズリ 内面:ナデ	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:灰色	天井部片	
41	須恵器	坏B身	P-08	②<1.75>	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	A:微細な砂粒を多く含む B:良好 C:灰色	高台部片	
42	須恵器	甕	P-11	②<2.4>	外面:平行タキ 内面:調整不明	A:微細な砂粒を多く含む B:良好 C:素地)褐灰色、灰黄褐色、 釉)オリーブ色	胴部片	外自然釉



## 第4章 結語

本書では福富小畠遺跡C地点の発掘調査の成果を報告した。

SA02は出土遺物から7世紀後半の柵列と考えられる。SA01は出土遺物が無いため時期が不明だが、主軸方位や柱穴間の距離が描うSA02と近い時期であろう。同時に存在した場合、食い違い状の進入路を形成する。6世紀後半の遺物が出土したSX03は竪穴住居の可能性がある。SX04は中世の土器の混入が見られるが、主体となる出土遺物から9世紀代の遺構であろう。

東側調査区外に続くSX03が竪穴住居であったとすると、当該地は6世紀後半の集落の西側周縁部であったと言える。また南北に走る柵列SA01・SA02もまた、この地点が7世紀後半の集落の西辺を区切る境界であった可能性を示す。調査区内はわずかに西に傾斜し、西端部では地形の落ちを確認していることから、今回の調査区は南北に伸びる低丘陵の尾根上平坦面の西際にあたることがわかる。福富小畠遺跡の古墳時代後期及び古代の集落は、地形に制限される形でこの地点以西に広がらない可能性が高いことが明らかになった。

これまでの福富小畠遺跡の調査（第3図参照）では、古墳時代の建物はA地点（小川2006）で竪穴建物17棟と掘立柱建物2棟、B地点（福岡県教育委員会2004）で竪穴建物28棟と掘立柱建物4棟、D地点（福岡県教育委員会2010）で竪穴建物1棟が確認されている。B地点では5世紀中頃に集落が出現し、6世紀初頭まで建物が増加し、その後減少傾向に入り7世紀後半に廃絶するという消長が示されている。しかし今回報告するC地点及びD地点ではB地点でピークと考えられた6世紀後半の竪穴建物跡とみられる遺構が確認されており、それぞれ地形を考慮すると集落の西縁と東縁にあたると推測される。したがって、福富小畠遺跡の集落全体で見ると、6世紀初頭に集落が最盛期を迎え、その後徐々に衰退するのではなく、集落の中心域が移動した、あるいは集落の範囲が拡がり建物が分散して配置されるようになったなど、建物の分布状況が変化した可能性がでてきた。

今後は福富小畠遺跡の空間的・時間的全容、さらには周辺遺跡との関係を解明していくため、既往の調査区の間隙及び周辺の調査が重要となる。地道な調査の蓄積によって、この地域の歴史が明らかになっていくことが期待される。

### 参考文献

- 小川秀樹 2006 「福富小畠遺跡」『行橋市史 資料編 原始・古代』行橋市史編纂委員会
- 福岡県教育委員会 2004 「福富小畠遺跡B地点」福岡県文化財調査報告書 第194集
- 福岡県教育委員会 2010 「福富小畠遺跡D地点」福岡県文化財調査報告書 第228集



版





(1960年米軍撮影、国土地理院発行を転載)

1. 福富小畠遺跡 C 地点周辺空中写真①



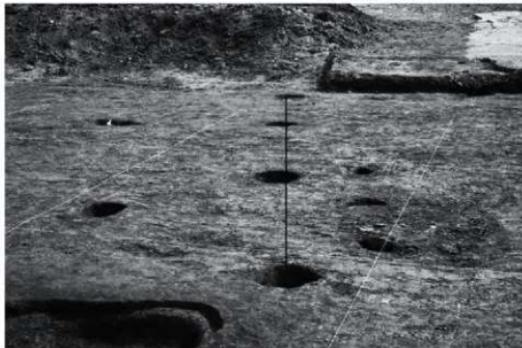
図版2 福富小畠遺跡C地点



1. 福富小畠遺跡C地点周辺空中写真(②)  
(2009年国土地理院撮影)



2. 調査前風景（南西から）



図版4 福富小畠遺跡C地点



1. SX04 (北から)



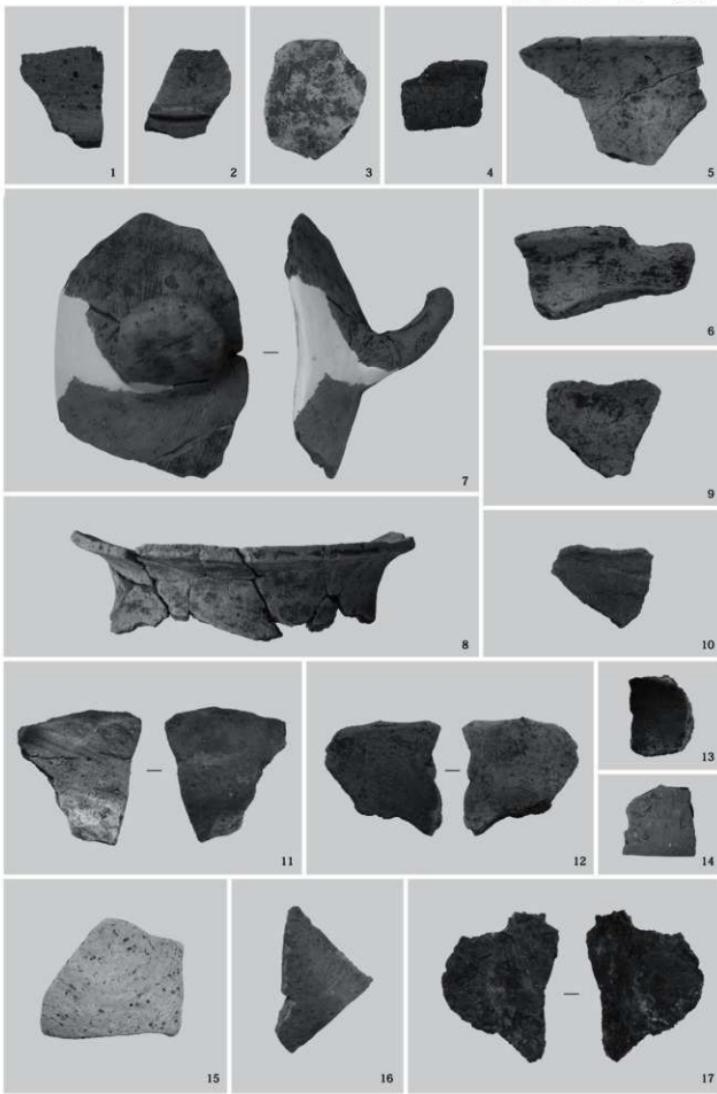
2. 挖削作業風景 (北東から)



3. 測量作業風景 (北東から)

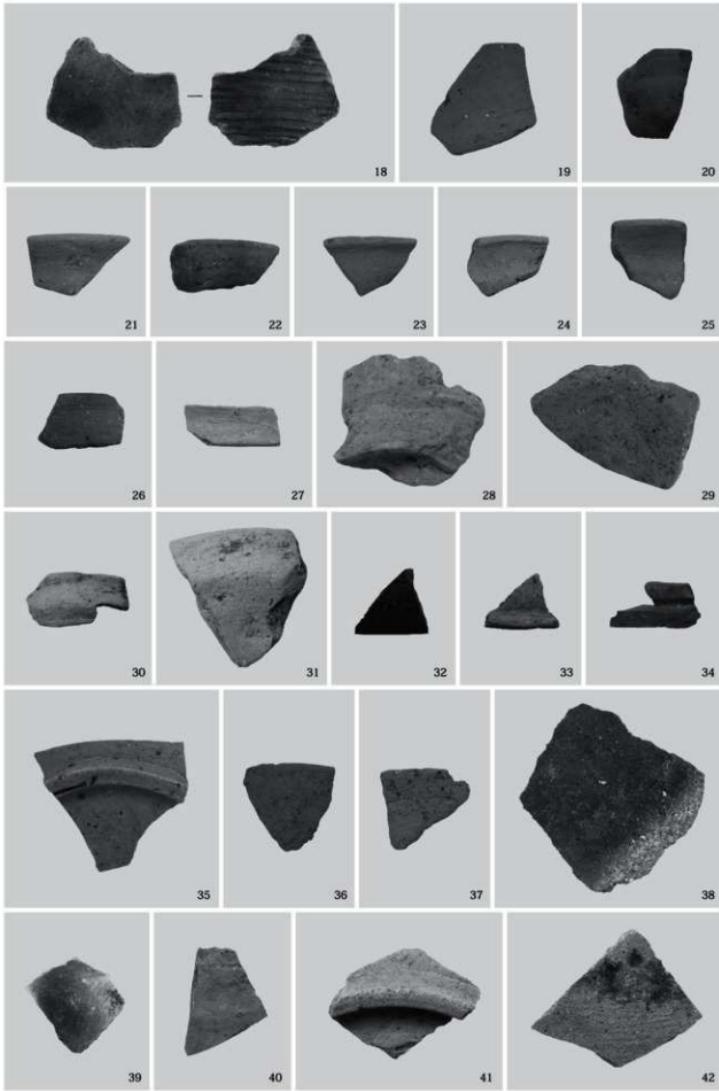


福富小烟遗址C地点 圆版5





图版 6 福富小烟道C地点



## 報 告 書 抄 錄



2016年(平成 28 年) 3月31日 猶行

## 福富小畠遺跡 C 地点

行橋市文化財調査報告書 第 60 集  
著作権所有 福岡県行橋市中央一丁目 1 番 1 号  
発 行 行橋市教育委員会

印 刷 福岡県行橋市大橋三丁目 1 番 18 号  
はら印刷

